

「建てる前に建てる」と訴えるのは、山形県鶴岡市に本社を構える総合設計事務所、ブレンスタッフの仲川昌夫代表だ。5年前に独自のビジネスモデル「d p c (データ・プレ・コンストラクション) 設計マネジメント」の考え方を示し、その確立に向けて着実に歩みを進めている。「着工前にコンピュータ上に建物を見える化することがd p cのコンセプトだ。BIMのフロントローディングによって大幅な業務の効率化を実現できる」と力を込める。



ブレンスタッフ 上



トヨタカローラショールームプロジェクト

M普及に向けた一歩を踏み出した。

翌年にはBIM設計部門を設立し、BIMオペレーター育成に力を注ぎ、ゼネコンや組織設計事務所への業務支援を行うための体制づくりに乗り出した。BIMの講師を社内にも招くとともに、外部講習にもスタッフを積極的に参加させ、社を挙げてBIMスキル向上を図り、加えて将来を見据えてIT系人材の採用にも力を注いできた。

同社は主力ツールにオートデスクのBIMソフト「Revit」を位置付け、現在は新築の設計業務で全プロジェクトにBIMを導入する。意匠担当の8割、構造担当では5割がRevitを自在に使いこなすまでに浸透した。トヨタカローラのショールームプロジェクトではBIMを使った干渉チェックで施工時の手戻りを事前に減らした。山形県遊佐町役場新庁舎建設事業では設計段階で町内の全職員を対象に新庁舎BIMモデルのVR(仮想現実)体験を行った。施工段階では工事監理者として、意匠や構造、設備モデルを使った干渉チェックや収まりの事前確認なども進めてきた。

最近では、大手ゼネコンからBIM業務を依頼されるケースが増えてきた。仲川氏は「単なるモデルとしてではなく、業務自体の支援役として連携している」と明かす。意匠設計グループの原拓也グループリーダーは「ゼネコンの施工BIMが広がる中で、施工図レベルまで対応できる当社の強みが発揮できている」と力を込める。同社が目指すのは、設計から施

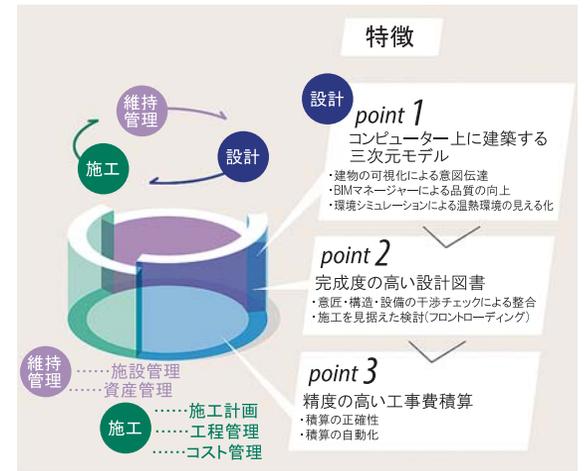
設計時に施工シミュレーション



仲川代表

同社とBIMの接点は2001年にまでさかのぼる。地元・鶴岡市に設立した慶大先端生命科学研究所との交流がきっかけとなった。当時のバイオ分野ではコンピュータを使った解析の合理化を進めており、その光景を目の当たりにした仲川氏は「建築も設計段階にコンピュータを使ったシミュレーションができれば、施工時の無駄を最小限に抑えられる」と思いを巡らせた。日本に到来したBIM元年「より8年も前のことだ。BIMで地域振興を進めたい」と考え、15年には山形県庄内町と連携し、内閣府の地方創生事業にも取り組んだ。少子高齢化の進展に危機感を抱いていた同町と、建設業界の高齢化に伴う担い手不足や技術伝承へのアプローチとしてBIMの普及を目指したいという同社の考えが一致し、地域へのBIM

「d p c」掲げ業務効率化



d p c設計マネジメントの考え方

工に至るまでの一貫したBIMの活用だ。着工前に施工シミュレーションまで行えるd p cの実現により、建築主は建物のデザインや性能、コストを納得のいくまで比較検討できる。施工者も着工前から生産性向上の取り組みを念入りに検討できる。

BIM導入にかじを切る全国展開のゼネコンとは対照的に、地域建設業ではBIMの普及がなかなか進まない。仲川氏は「地元建設会社が自らの力だけでBIMに取り組むことは難しい。当社が橋渡し役となり、協働体制を構築していきたい」と先を見据える。